チラシ作成活動を通した言語活動の充実

―アクティブラーニングを意識した授業デザイン―

水谷　徹平・小川　亮

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究
第10号　通巻32号 抜刷　　平成27年12月

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究　№10：61－70

チラシ作成活動を通した言語活動の充実

―アクティブラーニングを意識した授業デザイン―

水谷　徹平*・小川　亮

Fulfilling the Language Activities in the Class of Making Fliers.
― Designing Lessons with Intention to Set forward the Active Learning ―

MIZUTANI Teppei，OGAWA Ryo

摘要

小学生でも，アクティブ・ラーニングを意識した学習活動を行うことで，子どもの意欲態度を刺激し，主体的な学びを作ることができる。地域の教育支援人材を学校に招く交流会を計画し，それを周知するチラシ・ポスターの作成したり，交流会を実施する活動を通して，5年生児童を対象にした表現活動を充実させる実践を行った。子どもたちは，多くの人にパフォーマンスを見もらう目標を持ち，伝える相手を意識して，チラシ・ポスターを作成した。子どもたちは，来客の数や来客からの反応に動機づけられ，写真やキャッチコピーの組み合わせ，色や字体を工夫して作品を作成した。映像と言語を組み合わせることで，「書くこと」に苦手意識がある子どもも，多様な発想から表現行為を能動的に行い，相互行為や協働を促されながら，汎用的な資質・能力を高める事につながった。実践について報告すると共に，活動が子どもたちの学びにもたらした効果について考察した。

キーワード：タブレットPC　アクティブ・ラーニング　情報活用の実践力 小学校 国語 総合的な学習
Keywords：Tablet PC, Active Learning, Information Literacy, Elementary School, Japanese Language, Integrated Learning

１．はじめに

平成26年11月，下村文部科学大臣は小学3年生からの英語授業開始や日本史の必修化といった教科の見直しと同時に，「アクティブ・ラーニング」の学習・指導方法の検討を中央教育審議会に諮問した。「何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度，他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク，コミュニケーションの能力，さらには，豊かな感性や優しさ，思いやりなどの豊かな人間性の育成との関係」「言語活動や探究的な学習活動，社会とのつながりをより意識した体験的な活動等の成果や，ICTを活用した指導の現状等を踏まえつつ，今後の「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方」「『アクティブ・ラーニング』等のプロセスを通じて表れる子供たちの学習成果の評価方法」の検討を要請している。

文部科学省の用語集では，アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって，認知的，倫理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習等が含まれるが，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と示している。

現行学習指導要領では，「生きる力をはぐくむことを目指し，基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等をはぐくむとともに，主体的に学習に取り組む態度を養うために，言語活動を充実すること」としている。

知識基盤社会の到来，急速な社会の変化によって，子どもに知識や技能を伝達することだけでなく，どのような社会に変化しても対応できる資質・能力を育むことが一層求められている。「何を教えるか」という知識の質や量ではなく，課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習活動をどのように構想し，どのような成果と課題が見られるかについて，本実践を通じて考察する。

２．実践

２．１　概要

本単元では，小学校学習指導要領・国語の第5学年及び第6学年「B書くこと」の指導事項「ア 考えたこと

* 新潟県長岡市立脇野町小学校教諭

などから書くことを決め，目的や意図に応じて，書く事柄を収集し，全体を見通して事柄を整理すること。」と指導事項「ウ 事実と感想，意見などとを区別するとともに，目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。」を目指した言語活動として，総合的な学習の時間に，地域の方を学校に招く交流会を周知するチラシ・ポスターの作成を行った。

完成したチラシは，交流会前に近所の方や保育園児へ手渡しながら説明をした。自分たちのパフォーマンスを多くの人に見てほしいという目標と相手意識をもち，お客さんの数や反応などのフィードバック情報を動機づけとして，伝えたい心を言葉に乗せようと思考を重ねた。写真やキャッチコピーの組み合わせ，色や字体の工夫など，読み手の心をキャッチする要素をチラシ・ポスターとして伝えるべき情報とを，主体的に考え合い，複合的に組み合わせる単元を実施した。

また本実践は，課題解決的，協働的に表現を工夫し，相互評価することによるブラッシュアップを行わせることで，学習者に能動的な学習（アクティブ・ラーニング）を行わせることを目的とした。学習成果については，作品制作の過程と制作された作品から評価を行った。

２．２　対象

新潟県内公立小学校５年生児童１学級（26 名；男子 14 名，女子 12 名）。

２．３　期間

平成 26 年 11 月～ 12 月（全 8 時間）。

２．４　単元のねらい（国語科）

総合的な学習の時間において，交流先に宣伝するチラシ・ポスターの作成を通して，相手の心をキャッチする効果を考えながら，必要な情報を伝えるために，構成や表現を工夫することをねらいとした。

２．５　活動までの経緯

実践を行った５年生のクラスでは，総合的な学習の時間の活動として，学区にある保育園や老人ホーム，地域の家庭と交流を重ねてきた。その中で，子どもたちは自分も成長し，相手も喜ぶプロジェクトとして，ダンスや大道芸，合奏，クレイアニメや影絵制作などのパフォーマンスの練習に取り組んできた。そこで 12 月に開く，地域の方を学校に招いての交流活動では，事前にそれぞれのパフォーマンスをチラシにして地域に送り，参加者が見たいと思う活動の発表を選んで来てもらうことを計画した。

本単元の前には，国語科で作文や写真に随想を重ねた，わたし風「枕草子」作成を行った。また，図画工作では絵画とことばを合わせた「絵×コトバ」や，モダンテクニックを詩にした作品を作成した。特別活動では写真とキャッチコピーを組み合わせて「係ポスター」や隣の友だちのすてきな所を写真とことばで紹介する「ともだちポスター」作成を行った。子どもたちは，これらの学習活動の中で，自己表出を繰り返し経験し，自己肯定観を高めながら，写真や絵・模様と手書きやデジタルでのテキストを組み合わせる様々な経験してきた。

これらの経験を重ねていたために，今回実践した単元に入ると，「チラシやポスターをつくってお客さんにイベントを教えたら！？」という意見が子どもから自然に出た。自分たちが準備してきたパフォーマンスについて，相手の心をキャッチできるよう意欲的に工夫して書いたり，子どもの内発的動機づけから自然な言語活動を行ったりすることで，「書く」，「話す」，「聞く」，「読む」を分かつことなく，一体となった言語活動を主体的に進めていくことができるようになっていた。指導要領改訂の趣旨にあるように，生きていく中で教師が課題を与えなくとも学び続け，「ことば」と関わっていく姿からは，教師の課題を待ったり，教師の期待する答えを探したりするティーチャーワイズな子どもではなく，子ども自身が問題を発見し，作り，作りかえながら思いや考えを表現し，更新していく言語活動が可能となっていた。

実践を行った学級では，このような学習活動を支援する環境として，タブレット PC 児童一人一端末環境で単元開発研究を行っており，上記のような画像とことばを重ねる活動を行う上で，写真撮影や加工，保存などの可能性が広がることが期待された。

２．６　育みたい資質・能力 (下線は重点)

- 自分たちの伝えたい思いと情報，読み手の気持ちを考えて，チラシをつくろうとする（関心・意欲・態度）。
- 書いたチラシを発表し合い，表現の仕方や工夫に着目して助言し合う（話す・聞く）。
- <u>文と写真を組み合わせ，表現の効果について確かめたり工夫したりして書く（書くこと）。</u>
- 伝える相手や目的を意識して工夫や効果を比べ，複数のチラシやポスターを読む（読むこと）。

表１．実践の内容（２次，８時間）

次	時	活動内容	活動のねらい	教材・ツール
1	1	身のまわりのキャッチコピーを読む	・相手や目的を意識して工夫や効果を比べ，複数のチラシやポスターを読む	セブンイレブン、ローソン、ファミリーマート、エネオスなどのキャッチコピー
	2	身のまわりのポスターを読む		ジブリ・ディズニー映画、新聞広告などのポスター
2	3	アイデアメモをつくる	・文と写真を組み合わせ，表現の効果について確かめたり工夫したりして書く	ワークシート
	4	写真と言葉を組み合わせてチラシ・ポスターをつくる		タブレットPC（1人1台）、デジタルテレビ、スマートボード、ノートPCなど
	5			
	6	相互評価して修正する	・書いたチラシを発表し合い，表現の仕方や工夫に着目して助言し合う	
	7			
	8	修正を加えて印刷し、相手に届ける	・自分たちの伝えたい思いと情報，読み手の気持ちが伝わったかを自省する	プリンタ・印刷機

３．活動の実際（全８時間）

３．１　CM やポスターのキャッチコピーを読み解く（第１次，1,2 時）

学校のそばにあるコンビニエンスストアのキャッチコピーについて子どもたちに聞いたところ，「知らない」とのことであった。しかし，CM で流れている曲を途中

まで歌うと，クラスの多くの子どもが声を合わせて続きを歌った。「韻を踏んで，リズムよく，いい気分になれるコンビニを表している」という工夫も見つけた。他にも，掛け言葉や七五調など，CM などで耳にするキャッチコピーが意味やリズムの工夫にも気づいた。

その後，アニメ映画などのポスターや，新聞広告賞の作品などを読み解いた。言葉の工夫としては，前述の掛け言葉や音数によるリズム，押韻だけでなく，繰り返し，体言止め，倒置法，擬人法，反語表現などの効果について学習した。また，ポスターとチラシの違いについても，「ポスターは手に取らない分，インパクト勝負」，「チラシは手に取るから読む気にさえなってもらえれば細かい内容は小さくしたり，裏に書いたりしても大丈夫」，「チラシは A4 くらいだから写真１枚ものの方が目立つと思うけど，ポスターは大きいから，組写真みたいにしていろんな写真を載せられる」といった表現上のことや，「チラシの人は，知っている人に説明しながら渡せる」など，ポスターとチラシの特性について話し合いを行った。

３．２　アイデアメモをつくる（第２次，３時）

アイデアメモ（図１）で，自分の来て欲しい人を思い描き，分担しながらアイデアメモを作成し，相手・目的・手法を意識して書き込んだ。手法については，手書きかタブレットを使ったデジタル作かで話し合いが起こった。子どもから「タブレットでつくった方が『子どもがこんなものを作れるのか！』と思える」という子どもと，「デジタルで作るとその人向けというよりもみんな向けの感じ。手書きの方がその人への気持ちがこもっていそう」といった子どもがおり，議論が盛り上がった。「僕は字が汚いしなぁ」「デジタルだと見やすい」「直しも簡単」，「手書きだと個性が出る」など，子どもから出たそれぞれの特徴をまとめた上で，その選択は本人に委ねることにした。全て手書きにこだわった子ども（１名），フルデジタルでつくると決めた子ども（３名）もいるが，22 名は，表面はデジタルで，渡す人向けのメッセージは手書きでといった形を選んだ。

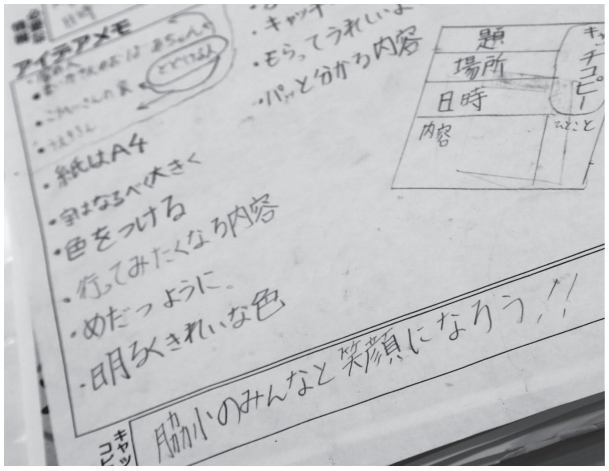

図１．A 児の作成したアイデアメモ

３．３　写真とキャッチコピーを組み合わせたチラシをつくる（第２次，４・５時）

図2．タブレット PC を使ってチラシ作成

アイデアメモ段階で，N2 法やマインドマップ，マンダラートなどを使ってキャッチコピーを先に考える子どももいれば，まずはイメージ写真を撮ってからレイアウトを考える子どももいるなど，それぞれの経験を生かして考えていた。多くの子どもはデジタルと手書きを組み合わせて作成し，裏は手書きしたものを選択し，表はタブレットで写真とことばを組み合わせたものが大半となった。タブレットで作成する際には，文字の色や大きさ，配置を変えながら画面上で変化を見て，見やすいものに変えようと試みていた（図２）。

３．４　作成したチラシを相互評価して修正する（第２次，６・７時）

全員のチラシを掲示し，気付いたことや工夫について，相互にアドバイスを行った。「いい」「気になる」と子どもたちが評価したのは，学校の 140 周年記念につくったゆるキャラ「あおいちゃん」を大きく載せた写真が目立つものであった。インパクトがある写真を背景に，キャッ

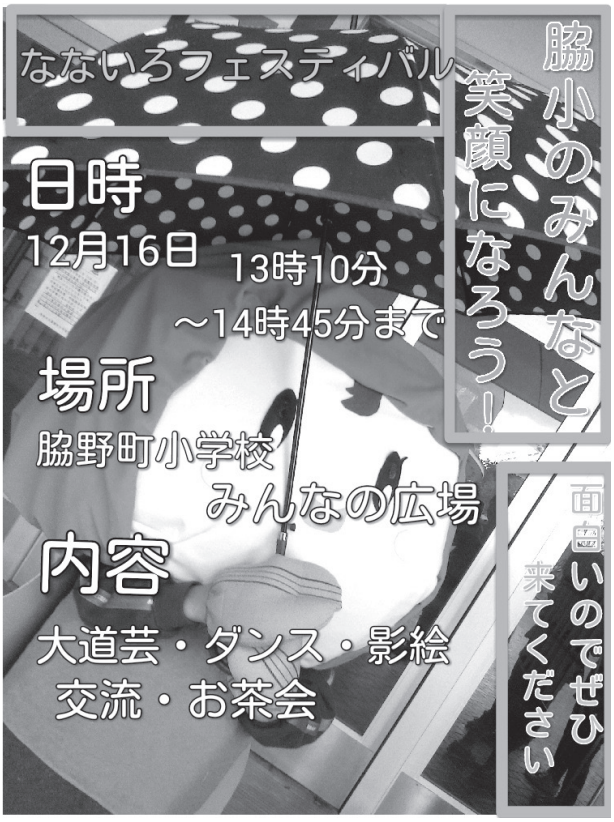

図３．相互評価前の A 児の作品

表２．A 児の作品の改善についての変容の過程

C児	：	キャッチコピーがもっと目立つといいね。
A児	：	短くしないと入らないんだよね…。（しばらく悩む）
D児	：	違う言い方で言えないかな。そのままだし…。
A児	：	ハッピー，スーパーハッピー…トリプルハッピーは？
C児	：	なんでトリプルなの？
A児	：	おじいちゃんたちも，保育園の子も，僕らも笑顔だといいかなって…
C児	：	いいね～

図４．相互評価後の A 児の作品

チコピー「脇小のみんなと笑顔になろう！」，ボディコピー「面白いのでぜひ来てください」「なないろフェスティバル」「日時」「場所」「内容」が示された作品であった（図３）。

気づいたことを相互にアドバイスするために用いた付箋紙には，「楽しい雰囲気が伝わるね」「名前を書いた方がいい」といった意見が書かれていた。「最初に目に付く所はどこか」という視点を与えたところ，写真のインパクトが大きく，キャッチコピーが目立たないということにも気づいた。作品の改善のための話し合いの中にも，考えを深めていく過程が見て取れる。A 児の作品の改善についての考えの変容の過程を表２に示した。それを受けて改善が行われた作品を図４に示した。

B 児は地域のコンビニに貼らせてもらうポスターを作成していた（図５）。キャッチコピーは「大発表」。交流で使ったタブレットの画面に，「和気あいあい楽しんだ」というメッセージが表示されている写真が用いられていた。「レイアウトが変わっていていい」「紫色の背景に青い文字だと見にくいかも」「キャッチコピーをもっと長

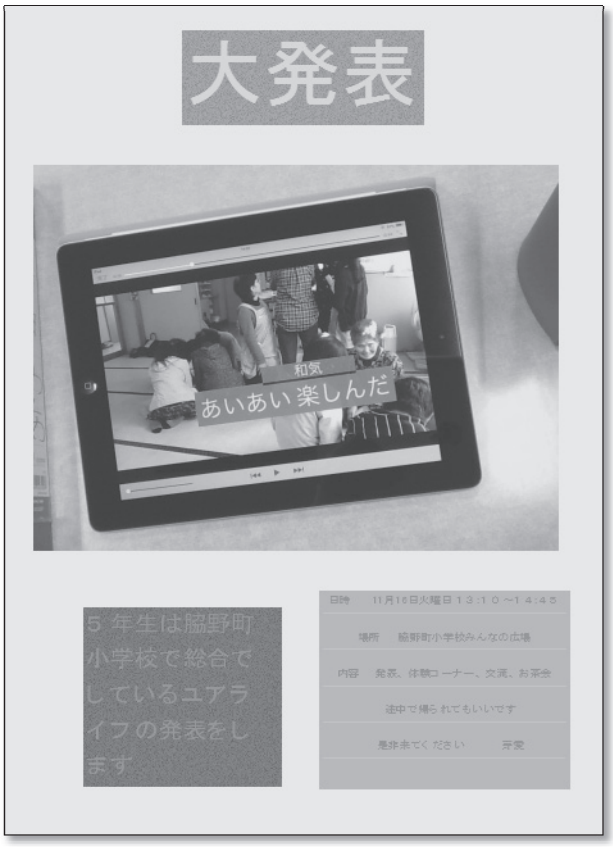

図５．相互評価前の B 児の作品

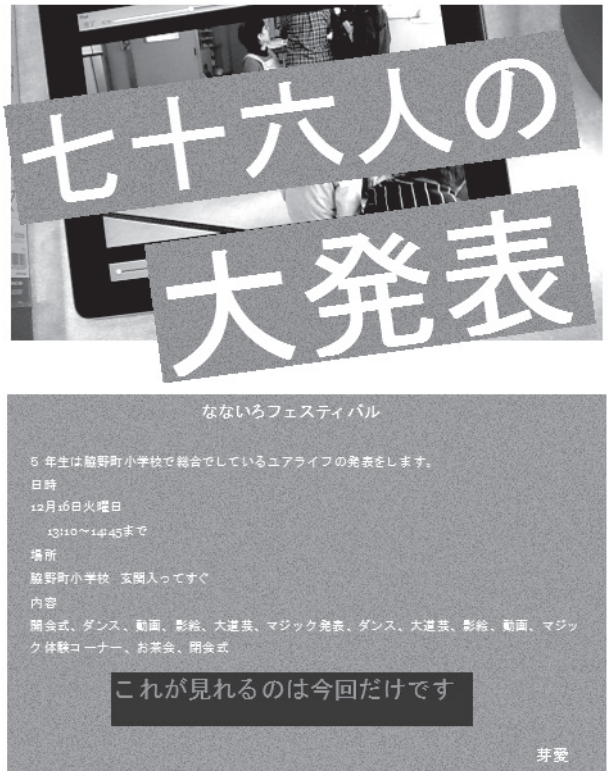

図６．相互評価後の B 児の作品

くしてもいいと思うけど，みんなのと違っていい」といった意見を付箋紙でもらっていた。初回の相互評価は，見た目，インパクトという視点からの意見が多く，フォン

トの色や大きさ，文字の位置などのレイアウトを修正した。そこで，「見た人が来たくなるか？」という視点を与え，キャッチコピーのみを一覧にして提示し，感想交流を行った。

その結果，Ｂ児は学年全員で盛り上げたいという願いを込めて「七十六人の大発表」と修正し，「これが見られるのは今回だけです」と希少性を表現したコピーも添えるなど，ブラッシュアップを重ねた（図６）。

３．５　チラシを地域に届ける（第２次，８時）

子どもたちは作成したチラシやポスターを自分の渡したい相手や貼らせてもらう場所の方へと持っていった（図７）。作ったものに対する反応がどういったものであるかを直接受ける場面と言える。チラシでもポスターでも，説明したり，一緒に読んだりしながら渡した。自身で説明しながら，書ききれていない所，チラシでは分かりづらかった所など，フィードバックを受けることになる。子どもにとって自然な形で実際に活用される経験，その効果がどうであったかを振り返る経験を組み込むことで，真正な他者評価を受け，これらの活動を通して汎用的能力も育成されることが確認できた。

図７．チラシを届けて，評価を受けとるＢ児

４．本実践の成果と課題

本実践の中で，詩やキャッチコピーの制作など，言語感覚やセンスの比重が高いものだけを取り出して指導することの難しさを改めて感じた。表現技法の指導や拡散系の思考ツールの活用など，手立てを示したり印象批評はできたりしても正解がある訳ではない。教師としての出番に悩みながら，子どもが本気でよいものにしたいという思いをもてる活動するにはどうしたらいいのかを意識して活動を構想した。

国語科の内容で扱う多くの「書くこと」は読み手に向けるものであるが，その読み手は不明確な場合が多い。自分たちが開く交流会を広く知ってもらい，多くの人に集まってもらいたいという子どもにとっての必然が，書く活動に対する相手意識・目的意識となった。

本単元で，子どもは作品を主体的につくり，つくりかえることを繰り返し，友だちの作品を認めながらもよりよくしようと相互評価することを通して表現を練り上げていく姿が数多く見られた。共通の目的，多様な相手を対象とした子ども発の言語活動を行うことで，「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ」とされるアクティブ・ラーニングとなり，主体性の発揮，多様な価値と相互作用による学び合いとして機能したと考えられる。

表３に感想交流前後のキャッチコピーの内容と文字数を示した。キャッチコピーの文字数平均は，ブラッシュアップ前後で 11.5 文字から 13.4 文字と少し増加したが，対応のある t 検定の結果，有意な変化は認められなかった。しかし，23 チーム中 18 チームがなにがしかの修正を加えていた。

図８に感想交流前後のキャッチコピーに含まれる表現技法ごとの度数を図示した。修正前後で使われた表現技法を見ると，英語表現，語尾の省略，倒置法などが大きく増加した（対応のあるサイン検定の結果，両側検定で $p<0.01$）。直接説明するのではなく，言い換えたり，言わずに余韻を残して読み手に想像させたりしようとした思考が働いたと考えられ，表現の工夫を吟味した様子がうかがえる。

表３．子どもたちのキャッチコピーの一覧と文字数の変化

単独で作成したキャッチコピー	文字数	感想交流後のキャッチコピー	文字数
みなさん見て見て	8	脇小で楽しもう	7
脇小で楽しもう	7	エンジョイしよう	8
ダンスはキレキレ大技まんさい	14	キレキレダンス大技まんさい	13
お茶おいしいので来てください	14	楽しみたくない人はこないでください	17
脇小のみんなと笑顔になろう	13	みんなとトリプルハッピーを	13
なないろフェスティバルにレッツゴー	17	最高のハッピーを	8
楽しもう、ふれあおう、もりあがろう	17	楽しもう、ふれあおう、もりあがろう	17
皆さんも体験してください	12	あなたもプロに	7
脇小でニコニコ楽しもう	11	脇小でニコニコ	7
なないろをおこします	10	なないろをおこします	10
体験できて楽しめます	10	体験できて楽しめます	10
脇小へgo	5	GO!脇小へ	6
ふれあおう脇小で	8	ハッピーを脇小で	8
映画にダンスに大道芸，動画もあるよフェスティバル	24	影絵にダンスに大道芸，動画もあるよフェスティバル	24
なないろフェスティバル	11	楽しもう(enjoy)、なかよくなろう(friend)、脇小で(ワキノマチschool)	44
未定	0	楽しく過ごせるのは、い・ま・だ・け！	18
ここで楽しいひとときを	11	ここで楽しいひとときを…	12
未定	0	もりあがろう	6
未定	0	脇小体験楽しもう	8
140周年記念マスコットあおいちゃん	18	脇小だ、発表だ、お茶会だ！	13
脇小で仲良くしよう。そして楽しもう	17	楽しもう　なかよくしよう　脇小で	16
大発表	3	七十六人の大発表～これが見られるのは今回だけです～	25
大道芸	3	大道芸	3

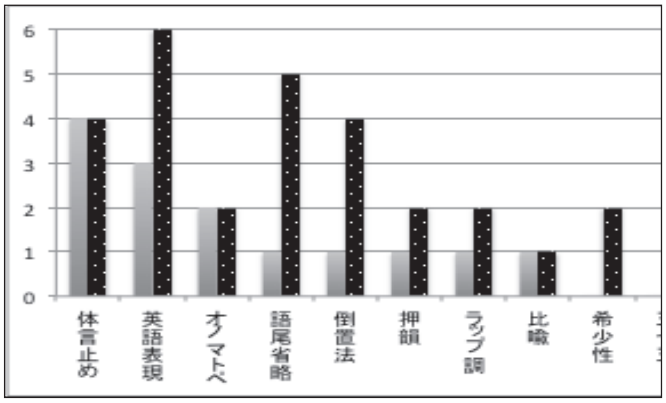

図８．キャッチコピーに用いられた表現技法の比較

公開授業として公開し，参観した教師より，「この授業は国語なのかどうか」といった指摘を受けた。子どもにとっては「キャッチコピーを練る活動」ではなく,「お客さんが来たくなるチラシを考える活動」であった。言語表現だけでなく，連続型テキストにあたるキャッチコピー以外の部分についても吟味や再構成を行う姿が多く見られた。教科の学習内容として，分かたれない言語活動を国語科として行う上で，どう切り分け，教科としての目標や内容に向かいつつ，汎用的な資質・能力を育んでいくべきか課題が残った。

５. 考察

国立教育政策研究所は，「『生きる力』としての知･徳･体を構成する資質・能力から，教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し，これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ，それらを『基礎』『思考』『実践』の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組みを『２１世紀型能力』」としている。そして，思考力を中核とし，それを支える基礎力と,使い方を方向づける実践力の三層構造で表し，思考力については，「問題解決･発見力･創造力，論理的･批判的思考力・メタ認知･適応的学習力」を挙げている。

本実践では，タブレット端末を活用したチラシ，ポスターの制作を行った。基礎力として発揮される「言語，数，情報（ICT）を目的に応じて道具として使いこなすスキル」の中でも，特に言語スキルと情報スキルについて，表現への関連が大きいと考えられる。

「日常生活や社会，環境の中に問題を見つけ出し，自分の知識を総動員して,自分やコミュニティ,社会にとって価値のある解を導くことができる力，さらに解を社会に発信し協調的に吟味することを通して他者や社会の重要性を感得できる力」として位置づける「実践力」を挙げている。

上記を意識して，抽出児童の制作物の変容，児童の作文シート，授業デザインの視点の３点から考察する。

５．１　抽出児童の制作物の変容から

抽出児Ａ児，Ｂ児のチラシにおけるブラッシュアップ前後の変容と，変容の過程について考察する。

Ａ児のチラシは「脇小のみんなと笑顔になろう」から,「みんなでトリプルハッピーを」というキャッチコピーへと変容している。「もっとキャッチコピーが目立つとよい」という友だちからの意見に対し，「短くしないと入らないんだよね…」と，目立たせるために文字を大きくするには文字数を減らす必要があることをつぶやき,「そのままだし」という友だちからの意見で，言い方を変えて短くでき，説明文のような直接的な表現ではない表現方法を模索していることが見出される。「笑顔になろう」の部分を「ハッピー」という表現に言い換え,「みんな」の部分，すなわち招待した「お年寄り」,「保育園

図９．キャッチコピーを目立つように修正したチラシ

児」と「自分たち」の意味を込めた「トリプル」を付け，「みんなでトリプルハッピーを」というキャッチコピーにしたと考えられる。4音・4音・5音で区切られてリズムもよく，文末を省略したことによって余韻を残しつつ，16字から13字に短くなっている。

割り付けを見ると，キャッチコピーの占める面積は紙面の6分の1程度から3分の2程度へと大幅に増え，暗い背景に赤色の文字から，補色関係に近く，明度にも差が大きい黄色にすることで，キャッチコピーが目立つように変わっている。ボディコピーの「なないろフェスティバル」「日時」「場所」「内容」については，内容に変更はないが，「おもしろいのでぜひ来てください」から「地域の方も家族全員で来てください」という表現に変わっており，相手や目的をより意識した表現になっていると読み取れる。

国立教育政策研究所が示す21世紀型能力にかかわる経験に当てはめたとき，説明する日時や場所など必要な情報を論理的な思考から選択し，掲載しながら，キャッチコピーや写真との組み合わせを考えて創造力を発揮し，自分のチラシではキャッチコピーが目立たないことを友だちからの意見でメタ認知し，言葉を言い換えて短くしようという問題解決に向けて思考しながら実際にタブレット端末を操作し，チラシを変更していく様子を見取ることができる。言語スキルと情報スキルを基礎力として発揮しつつ，様々な思考力を働かせ，実際にチラシを改善していく実践力を発揮したと考えられる。

B児については，「紫色の背景に青い文字だと見にくい」という指摘を受けて文字の背景をオレンジ色にするとともに，「キャッチコピーをもっと長くしてもいいと思う」と付箋でもらってキャッチコピーをどうするかを考え始めた。学年の人数を示し，「七十六人の大発表」と修正し，「これが見られるのは今回だけです」と希少性を表現したコピーも添えた。これには，B児と席が近くの児童が「楽しく過ごせるのはい・ま・だ・け！」というキャッチコピーをつくり，全体で取り上げた際に「希少性が人の心を打つのに有効な場合がある」と学級で意味付けたことが作用していると考えられる。

A児と同じく21世紀型能力にかかわる経験に当てはめたとき，ポスターの原案としてのデザインで創造力を発揮し，「キャッチコピーがもう少し長くてもいい」という意見や「この配色では文字が見にくい」という指摘を受けて，問題をメタ認知し，配色を変えて文字を見やすくするとともに，キャッチコピーの音数を増やそうという問題解決に向けて思考している。やはり実際にタブレット端末を操作し，時と背景の配色を変更しながら見やすいものを試し，改善に向かっている。言語スキルと情報スキルを基礎力として発揮しつつ，様々な思考力を働かせ，ポスターを改善するよう実践力を発揮したと考えられる。

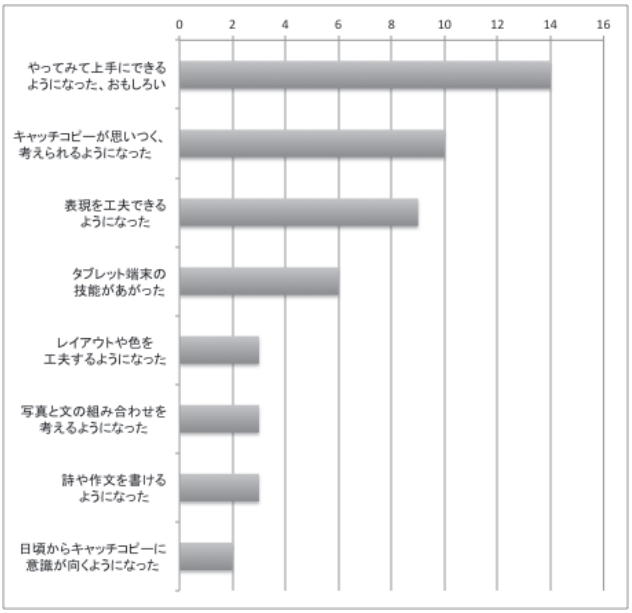

図10. 単元終了時の内容分類結果　分類ごとの人数分布の図

5．2　児童の作文シートの結果から

単元を終えた時点で，単元の振り返りを作文にまとめさせた。筆者が内容を分類した結果を図10に示した。

「①やってみて上手にできるようになった，おもしろい」が14名，「②キャッチコピーが思いつく，考えられるようになった」が10名，「③表現を工夫できるようになった」が9名，「④タブレット端末の技能があがった」が6名，「⑤詩や作文を書けるようになった」が3名，「⑥写真と文の組み合わせを考えるようになった」が3名，「⑦レイアウトや色を工夫するようになった」が3名，「⑧日頃からキャッチコピーに意識が向くようになった」が2名であった。

①については，タブレット端末を利用したということによる新奇性効果もあると考えられるが，本実践を肯定的に受け止め，能動的に活動に取り組みながら，実践力を発揮する経験を積んだということも考えられる。②について，筆者の目から見ても，悩んで鉛筆が止まる子どもや考えている時間が圧倒的に減ったことを感じる。本実践と同時に取り組んでいた学級活動における「友だちポスター」制作で友だちのよさをキャッチコピーと写真の組み合わせで表す活動や，自分たちの係活動をキャッチコピーと写真の組み合わせで表す活動を，本実践と重ねたことが影響し，適応的学習力が発揮されたと考える。③については，国語科の詩の単元で取り扱った言語事項の学習も影響している記述が作文にも見られた。本実践での学習活動が言語スキルという基礎力を発揮しつつ，読み手がどう思うかを考え，メタ認知や問題解決力を発揮して実践力を働かせる場となったと考える。④については，基礎力の中の情報（ICT）を目的に応じて道具として使いこなすスキルに関わる部分であり，経験を重ね

ることによって写真撮影や文字のフリック入力，ファイル保存や印刷といった技能だけでなく，何度も文字の大きさや色を変えながら試すことができるタブレット端末のもつメディア特性に言及している子どももいた。⑤について，係ポスター制作では，写真をプリントアウトしてからキャッチコピーをペンで上から書いていたが，タブレットでの作成がほとんどとなった本実践では，少しずつ色や大きさを変えては遠くから見てみるといった行為を複数回行う子どもがほとんどであり，④と並んで改変が容易であるというタブレット端末のメディア特性を理解し，活用していた様子が見られた。⑥については，大道芸をしている自分たちの写真に「皆さんも体験してください」というキャッチコピーを組み合わせるなど，なないろフェスティバルを象徴するような写真と，それを説明する直接的な表現が，ブラッシュアップ後は「あなたもプロに」と，より強く印象づけるような短い言葉に言い換えていた。「読んだ人がどう言うことだろうと興味をもってくるような言い方」を考えるようになったとシートに記している。また，少数ではあるものの，⑦や⑧で示されるように他の力に転移したり，生き方に関わったりする記述も見られた。

５．３　授業デザインの視点から

国立教育政策研究所の「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」では，学習指導の課題について，「例えば，①転移可能（portable）な学習にするために，断片的な知識の記憶や再生ではなく，知識を統合する課題や現実のリアルな課題の探究を通した深い理解に至る構成主義的な学習観を中心に位置づけること，②児童･生徒が学習の進捗を自分でモニターし，知識不足の解消や課題の発見をコントロールしながら遂行することができる『自律的な学習者』になることをめざすこと，③小集団で協力して問題解決する協調学習を積極的に取り入れ，問題解決型やプロジェクト型の学習を重視すること，などがある」と示している。

そして，「「知識の習得と活用を一体化し，知識をその場で使うことを見込んで習得する授業」の方が効果を上げやすいように，常に 3 つの 21 世紀型能力全体を意識しながら授業を行う道もありうる」と示している。

相手意識と目的意識を子どもが明確にもち，試行錯誤と相互評価が保証された授業デザインは,『基礎』『思考』『実践』を子どもが行き来し，『21 世紀型能力』を育むデザインとなり得る。反面,国語として目指す「書く力」と汎用的な資質･能力がどのようにかかわっているのか，思考力だけをとっても，問題解決・発見力・創造力，論理的・批判的思考力・メタ認知・適応的学習力をそれぞれの子どもがどの程度発揮し，どの程度育ったのかを切り分けて評価していくことが大変難しいことも改めて感じた。教師として子どもの様子を見ている限り，確かに思考し,実践力を育んでいるという実感はあるものの，それぞれの力がそれぞれの子どもの中でどのように育まれたのかについて客観的に示せなかった。どのような活動をしたことで成長が促されたのかについての相関を分析する方法を考えたい。

６．おわりに

６．１　「書くこと」の在り様の変化

公開授業参観者から，「一人の子どものチラシを見たが，イベントを説明する文章はあったがキャッチコピーは書かれていなかった」と指摘を受けた。E 児のチラシは，「お茶おいしいので来てください」と，内容が文章で書かれているものであった。E 児は春に出会ったときから「書くこと」に苦手意識を強くもっていた。運動会後など，あったこと・したことを書けるような場面でも鉛筆が進まず，うなり声を上げて作文用紙を丸めて投げ捨てたこともあった。

話し合いでは発言は多く，論理的に物事を考えるのは得意だが，書くことは苦手。そんなD児が，タブレット一人一台環境で「わたし風枕草子」をつくり始めたとき，休み時間にも自分で写真を撮っては作品を作り担任に見せにくるようになった。

手書きの作文も，題材にもよるが 20 分で 800 字程度とずいぶん書けるようになった。タブレットの導入による新奇性効果も考えられるが，写真があることで写真を説明したり，写っていないことを書いたりしやすくなったと考える。何がしか心が動いて写真を撮り，「どうしてこの瞬間，この対象を撮ったの？」「なるほど。その気持ちを書いてみたら…？」と，教師や友だちが声をかけやすいこともこの姿に寄与したと考える。

年賀状，電子メール，SNS でのつぶやきなど，報告文書などの定型ではない，気持ちを表現するための書く行為を考えたとき，写真や画像と言葉を組み合わせる効果は高いと考える（図 11）。

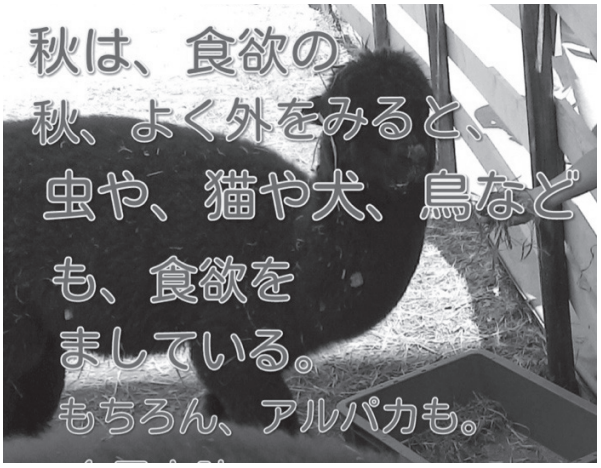

図 11.　E 児のわたし風枕草子の作品

また，フリック入力や予測変換を自然に使いながら書く子どもを見たとき，生活に生きたり，現実の課題を解決したりするのに鉛筆と書き言葉のみを主眼とした「書

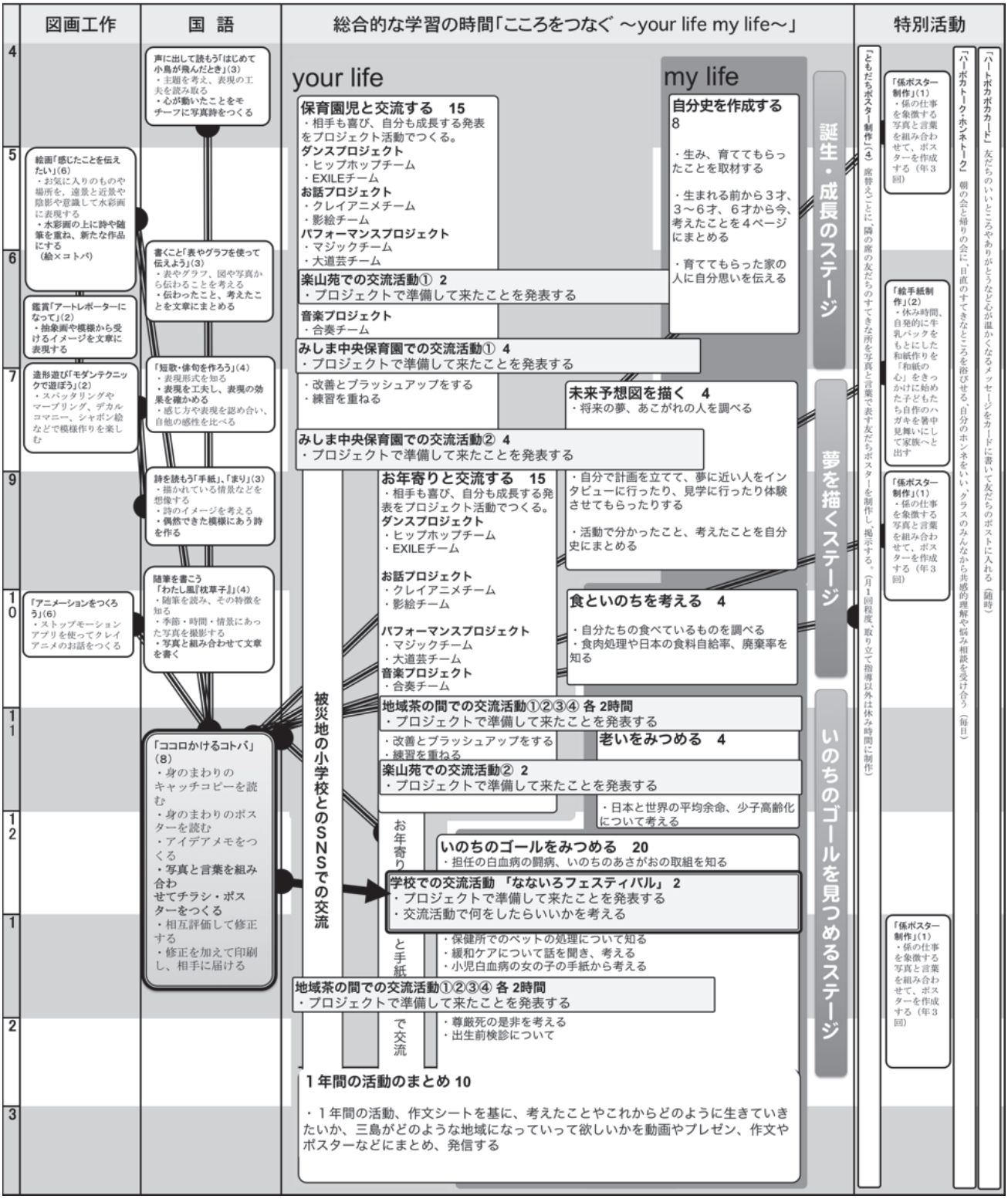

図 12.　平成 26 年度５年生の年間活動構想表　本単元にかかわる部分のみを図示した

くこと」だけではないようにも考える。子どもが 30 代，40 代になる時代には，「書くこと」の様態や情報や感情を伝達するツールは大きく変わっていくだろうと予測されるからである。

教育実践の目的はどんな子どもにも効くメソッドを身につけさせることや，今の時代に合う知識や技能を身に付けさせることだけではない。一人一人の子どもにとって，どう成長を促すのかを考え続けたい。

６．２　子どもが能動的になる活動デザイン

本単元ではポスター，チラシや CM など生活場面でふれる「ことば」を対象にした。既習知識と生活経験をつなげ，出あった「ことば」に感性を働かせて味わうよ

うになれば，多様で豊富な読解を日々重ねることになる。具体的な相手と目的を意識し，子どもが工夫した表現に正のフィードバックを受ければ，多様性や表現への主体性に対して肯定的な感情を持つだろう。語彙や技法を多くもたない子どもの詩や言語表現に感動することは多い。反面，特に書きたくないことを「先生が言ったから…」「教科書にあるから…」と，最後まで外発的動機づけで書くことしかできないとき，仮に技法や語彙は身に付いても，その言語活動は子どもにとって能動的になり得るだろうか。

どんな世の中やツールだろうと，語彙や言葉に関わる技法や技術は必要で，シャワーのように言葉を浴び，しみ込ませていく必要があるだろう。しかし，語彙や技法を増やせば誰もが詩人やコピーライターになれるというものではない。殊に9歳半の節目を超え，自我が確立しつつある高学年においては，子ども自身に表現したい思いがあり，読んで欲しい相手がいてこそ子どもは能動的な表現者になるのではないだろうか。本実践では「伝えたい思いや考えを書きたい」と子どもが自然に思えるような活動をつくることが，汎用的な資質・能力を学習することにつながる手応えを得た。言語活動がただ，活動的であるだけでなく，そこに子どもの意識に沿った自然な活動として教師が単元をデザインできれば，子どもの内発的動機づけをもとに，社会や他者と関わっての協働やコミュニケーション，読解や表現といった，切り分けられない学びが起こると考える。

総合的な学習の時間と国語科を中心に，図画工作科や特別活動とも合科的な表現活動をデザインすることにより，相手と目的が明確な表現を能動的に行える。また，映像と言語を組み合わせることにより，「書くこと」のみでは苦手意識がある子どもも，多様な発想から表現行為を行うことが見て取れた。目的的なチラシ作成を，タブレット端末で撮影した写真とキャッチコピーやボディコピーといった言語を組み合わせた表現行為と捉えて単元をデザインすることで，相互行為や協働を促されながら，能動的に汎用的な資質・能力を高める事につながったと考える。

文献

- 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」，文部科学省，2014，（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm　2015.7.31）
- 「用語集」，文部科学省，2012，（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf　2015.7.31）
- 「学習指導要領」，文部科学省，2011，（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm　2015.7.31）
- 「小学校学習指導要領解説　国語編」，文部科学省，2011，（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/12/28/1231931_02.pdf　2015.7.31）
- 「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」国立教育政策研究所，2013，（http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf　2015.7.31）

（2015年8月31日受付）
（2015年10月13日受理）